

## タタール語の所有名詞句における所有人称標示

菱山 湧人

### Possessive person markings in Tatar possessive noun phrases

Yuto HISHIYAMA

#### Abstract

This paper aims to reveal the factors influencing the frequency of the appearance of 1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> person possessive suffixes in Tatar possessive noun phrases, based on corpus analysis and elicitation.

Tatar language has three structural types of possessive noun phrase: 1) Synthetic type, in which possessor is expressed only by possessive suffix; 2) Analytic type, in which possessor is expressed only by genitive personal pronoun (only 1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> person) ; 3) Analytic-synthetic type, in which possessor is expressed by both genitive pronoun or noun and possessive suffix.

Previous studies argue that analytic-synthetic type, which has a possessive suffix, is more common in written language, whereas analytic type, which doesn't have a possessive suffix, is more common in spoken language.

The results of analyses demonstrate that some morphosyntactic factors such as the person and number of the genitive personal pronoun, the kind of the head noun, the adjacency of the modifier and the head noun etc. influence the frequency of the appearance of 1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> person possessive suffixes.



## 目次

## 0. はじめに

## 1. 先行研究

## 1.1. Zakiev et al. (1993)

## 1.2. Xangildin (1959)

## 1.3. Dmitriev (1956)

## 1.4. 問題提起

## 2. 調査

## 2.1. 調査方法

## 2.2. 調査結果

## 2.2.1. 限定部の人称・数

## 2.2.2. 限定部と主要部の隣接性

## 2.2.3. 限定部と主要部の語順

## 2.2.4. 主要部要素

## 2.2.5. 主要部に付く接辞

## 2.2.6. 介在要素

## 2.2.7. 存在文・所有文

## 2.2.8. 調査結果のまとめ

## 3. 考察

## 3.1. 所属人称接辞の有無を義務的にする要因

## 3.2. 所属人称接辞の出現頻度を高めるまたは低める要因

## 3.3. 要因の相互関係

## 4. 今後の課題

## 略号一覧

## 参考文献

## 調査資料

## 0. はじめに

類型論的に、言語は従属的な文法関係の標示法として主要部標示 (Head-marking) を用いるものと、従属部標示 (Dependent-marking) を用いるものに分けられる。この他に、両方を使う二重標示 (Double-marking) を用いる言語や、いずれも使わない無標示を用いる言語もある。Nichols (1986: 65) は、二重標示を用いる言語の例としてトルコ語を挙げている。本稿で扱うタタール語は、トルコ語と同じくチュルク諸語に分類される言語である。タタール語の所有名詞句<sup>1)</sup>は、所有人称を標示する以下の3通りの構造を持つ。

- 統合型 (所属人称接辞で標示する: *at-im* 「私の馬」)
- 分析型 (属格の名詞句で標示する: *minem at* 「私の馬」)
- 分析統合型 (属格の名詞句と所属人称接辞で標示する: *minem at-im* 「私の馬」)

先行研究には、1) 統合型は文語でも口語でも同程度に用いられ、被所有名詞が強調されている、2) 分析統合型は文語的で、所有の概念を強調する際に用いられる、3) 分析型は一・二人称に限られ、口語的で

ある、といった記述が見られる。しかし筆者の観察では、これらの構造の出現頻度には文体的な要因以外に、形態統語的要因も関わっているように感じられる。

本稿では、特に分析型と分析統合型に着目し、コーパス調査およびインフォーマント調査により、所属人称接辞の出現頻度には限定部の人称・数や主要部要素、限定部と主要部の隣接性などの形態統語的要因が関わっていることを示し、その理由を考察する。

本稿の構成は次の通りである。まず第1章で先行研究の記述を参照し、問題提起を行う。第2章で調査方法と調査結果について述べる。第3章で考察、第4章で今後の課題を述べる。

なお、本稿は筆者の修士論文である菱山 (2017) の一部を大幅に加筆・修正したものである。本稿における例文番号・日本語訳・グロス・外国語文献の翻訳・ラテン文字転写<sup>2)</sup>は筆者による。出典記載のない例文はコーパスから得られたものである。

## 1. 先行研究

本章では、1.1節と1.2節でタタール語に関する先行研究である Zakiev et al. (1993) と Xangildin (1959)、

1.3節でチュルク諸語全般に関する先行研究である Dmitriev (1956) の記述を参照し、1.4節で問題提起を行う。

### 1.1. Zakiev et al. (1993)

まず、タタール語の形態論に関する先行研究である Zakiev et al. (1993) の記述を参照する。Zakiev et al. (1993: 31) は名詞の所有カテゴリーについて、「このカテゴリーの基本的な意味は所有である。このカテゴリーの特別な接辞によって、物の人称への所有が表され、被所有物と所有者の人称が同時に示される。よって、それは三つの人称の形式によって表される」と述べ、所有接辞の表と、*bala* 「子供」に所有接辞が接尾した例を挙げている。

表1：タタール語の所有接辞

|   | SG                 | PL   |
|---|--------------------|--|
| 1 | -m, -im / -em      | -büz / -bez, -ibüz / -ebez   |
| 2 | -ŋ, -iŋ / -eŋ      | -yüz / -gez, -iyüz / -egez   |
| 3 | -sı / -se, -i / -e | -sı / -se, -i / -e<br>(-ları / -läre, -nari / -näre) <sup>iv</sup> |

(Zakiev et al. 1993: 32 をもとに筆者作成)

表2：*bala* 「子供」に付く所有接辞

|   | SG             | PL                         |
|---|----------------|----------------------------|
| 1 | <i>bala-m</i>  | <i>bala-büz</i>            |
| 2 | <i>bala-ŋ</i>  | <i>bala-yüz</i>            |
| 3 | <i>bala-sı</i> | <i>bala-sı / bala-ları</i> |

(Zakiev et al. 1993: 32 をもとに筆者作成)

続けて Zakiev et al. (1993: 32-33) は、一人称と二人称の所有が以下の三つの方法で表されるとしている。

#### 1) 対応する所有接辞によって (統合法)

表3：*däftär* 「ノート」を主要部とする一・二人称所有構造(統合法)

|   | SG               | PL                 |
|---|------------------|--------------------|
| 1 | <i>däftär-em</i> | <i>däftär-ebez</i> |
| 2 | <i>däftär-eŋ</i> | <i>däftär-eyez</i> |

(Zakiev et al. 1993: 32 をもとに筆者作成)

- (1) *Küz-lär-eŋ*      *čibär*      *ikän*,  
 目 -PL-2SG.POSS 美しい      MOD  
*kem*      *malay-i*      *sin?*  
 誰      男子 -3SG.POSS 2SG  
 「お前の目は美しいな、誰の息子だお前は？」  
 (Zakiev et al. 1993: 32)

#### 2) 人称代名詞 (所有者) と名詞 (所有物) の組み合わせによって (分析法)

表4：*däftär* 「ノート」を主要部とする一・二人称所有構造(分析法)

|   | SG                  | PL                   |
|---|---------------------|----------------------|
| 1 | <i>minem däftär</i> | <i>bezneŋ däftär</i> |
| 2 | <i>sineŋ däftär</i> | <i>sezneŋ däftär</i> |

(Zakiev et al. 1993: 32 をもとに筆者作成)

- (2) “*Miñnulla abziy, sineŋ fiker?*”  
 PN おじさん 2SG.GEN 考え  
*dip sora-di Yaqup.*  
 と 尋ねる -PST PN  
 “*Minem fiker=me? Sineke niček, mineke şulay.*”  
 1SG.GEN 考え=Q 君の どう 私の そう  
 「『ミンヌッラーおじさん、おじさんの考えは？』  
 とヤクップは尋ねた。」  
 「私の考えかい？君のと同じだよ。」  
 (Zakiev et al. 1993: 32)

#### 3) 属格人称代名詞と対応する所有接辞を持つ名詞との組み合わせによって (分析統合法)

表5：*däftär* 「ノート」を主要部とする一・二人称所有構造(分析統合法)

|   | SG                     | PL                        |
|---|------------------------|---------------------------|
| 1 | <i>minem däftär-em</i> | <i>bezneŋ däftär-ebez</i> |
| 2 | <i>sineŋ däftär-eŋ</i> | <i>sezneŋ däftär-eyez</i> |

(Zakiev et al. 1993: 32 をもとに筆者作成)

- (3) *Bu minem tuwyan awıl-ım.*  
 これ 1SG.GEN 生まれの 村 -1SG.POSS  
 「これは私の生まれ故郷だ。」  
 (Zakiev et al. 1993: 32)

それぞれのタイプの特徴として Zakiev et al. (1993: 33) は、「所有を表す一つ目の (統合) 方法は文語でも口語でもほぼ同等の分布を示すが、二つ目の (分析) 方法はより口語、三つ目の (分析統合) 方法はより文語に特徴的である。さらに最後の方法はそれが持つ感情性が際立っている」としている。さらに、分析統合法の持つ感情性は、倒置によってさらに強まるとし、以下の例などを挙げている。

- (4) *bala-m minem*  
 子供 -1SG.POSS 1SG.GEN  
 「わが子よ」

(Zakiev et al. 1993: 33)

続いて、三人称の所有に関して、「物の三人称への所有は通常、三人称代名詞の属格形と、同じ人称の所有接辞を持った名詞の組み合わせで表される」とし、以下の例を挙げている。

表 6: *däftär* 「ノート」を主要部とする三人称所有構造

|   | SG                   | PL                       |
|---|----------------------|--------------------------|
| 3 | <i>anıñ däftär-e</i> | <i>alar-nıñ däftär-e</i> |

(Zakiev et al. 1993: 33 をもとに筆者作成)

三人称の場合も倒置が可能で、同じく感情的なニュアンスを表すという。

- (5) *Adım-nar-ı jitez, küñel-e kütärenke,*  
 歩み -PL-3SG.POSS 機敏な 心 -3SG.POSS 高まった  
*uy-lar-ı yaqtı ide anıñ.*  
 考え -PL-3SG.POSS 明快な COP.PST 3SG.GEN  
 「彼の歩みは機敏で、心は高まり、  
 考えは明快だった。」

(Zakiev et al. 1993: 34)

上のような構造に加え、三人称への所有は接辞付加のみでも表されうという (例: *bala-sı* 「(その) 子供」、*kitab-ı* 「(その) 本」)。

Zakiev et al. (1993: 34) は、「三人称の所有接辞を持った名詞は、人称代名詞だけでなく属格の名詞によっても限定され、ある物の別の物への所有を表す」とし、以下の例などを挙げている。

- (6) *uquwçı-nıñ däftär-e*  
 生徒 -GEN ノート -3SG.POSS  
 「生徒のノート」

(Zakiev et al. 1993: 34)

さらに Zakiev et al. (1993: 35) は、三人称の所有接辞は所有だけでなく、時間、場所、全体部分など様々な関係を表すのにも用いられるとし、複合名詞の例を挙げている。

- (7) a. *kanikul waqıt-ı*  
 休暇 時間 -3SG.POSS  
 「休暇の時間」  
 b. *yort tübä-se*  
 家 屋根 -3SG.POSS  
 「家の屋根」  
 c. *yäşelčä aš-ı*  
 野菜 スープ -3SG.POSS  
 「野菜スープ」

(Zakiev et al. 1993: 35)

## 1.2. Xangildin (1959)

次に、タタール語文法に関する先行研究である Xangildin (1959) の記述を参照する。Xangildin (1959: 80) はまずタタール語の一・二人称の所有構造について、「一・二人称の所有構造は、物が人称 (人間) に所有されることのみを表す。よって、一・二人称の所有構造における語は、同一の人称代名詞とのみ統語的關係を持ちうる」とし、以下の例を挙げている。

表7: *xezmät* 「労働」を主要部とする一・二人称所有構造

|   | SG                     | PL                         |
|---|------------------------|----------------------------|
| 1 | <i>minem xezmät-em</i> | <i>bez-nej xezmät-ebez</i> |
| 2 | <i>sinej xezmät-ej</i> | <i>sez-nej xezmät-egez</i> |

(Xangildin 1959: 80 をもとに筆者作成)

続けて Xangildin (1959: 80) は、「また、このような構造では、被修飾部における接辞が省略され、*minem xezmät*, *sinej xezmät* のようにも発話される。なぜなら、代名詞の属格形は所有の概念も表すため、所有接辞の必要性が下がるからである。この構造はより口語的である。逆に、所有接辞が保持される場合は、属格人称代名詞が省略され得る（例：*kitab-ım*, *kitab-ıj*, *kitab-ıbiz*, *kitab-ıyız*）。所有の概念を強調する必要がある際には、属格人称代名詞と所有接辞が同時に使用される」とし、属格人称代名詞と所有接辞が同時に使用される例として以下の例を挙げている。この例では、他人の弟ではないことが強調されているとしている。

- (8) Bu bit minem ene-m!  
 これ EMPH 1SG.GEN 弟 -1SG.POSS  
 「こいつはおれの弟だ！」

(Xangildin 1959: 80)

三人称の所有構造に関しては、「人称への所有も、人称以外の物への所有も表せるため、三人称の所有構造における名詞は、三人称の代名詞とも、名詞とも、統語的關係を持ちうる」として、以下の例を挙げている。

- (9) a. anıj tormış-i  
 3SG 生活 -3SG.POSS  
 「彼の生活」  
 b. ešče-nej tormış-i  
 労働者 -GEN 生活 -3SG.POSS  
 「労働者の生活」

(Xangildin 1959: 80)

三人称の所有構造において限定部には様々な語が現れうることから、Xangildin (1959: 80, 81) は、「三人称の所有構造の概念は非常に広く、不確定である。そのため、それは常に示されなければならない。よって、三人称の所有構造における語は、通常、自身の限定部および接辞とともに発話される」とし、接辞や限定部が落ちるのは以下の例のように、接辞や限定部が二つの語に共通である場合でのみ見られるという。

- (10) bez-nej respublika-bız-nıj barlıq  
 1PL-GEN 共和国 -1PL-GEN 全ての  
*kolhoz häm sovhoz-lar-i*  
 コルホーズ と ソフホーズ -PL-3SG.POSS  
 「我々の共和国の全てのコルホーズとソフホーズ」  
 (Xangildin 1959: 81)

- (11) Čiyä ayač-i-nıj čäčäk-lär-e  
 サクランボ 木 -3SG.POSS-GEN 花 -PL-3SG.POSS  
 qoyıl-yan, läkin  
 散り落ちる -PRF しかし  
čiyä-lär-e küren-miy äle.  
 サクランボ -PL-3SG.POSS 見られる-NEG.PRS まだ  
 「サクランボの木の花は落ちたが、  
 サクランボはまだ見られない。」  
 (Xangildin 1959: 81)

### 1.3. Dmitriev (1956)

最後に、チュルク諸語における名詞の所有カテゴリーに関する先行研究である Dmitriev (1956) における記述を参照する。Dmitriev (1956: 34) は、「基本的な方法、つまり所有接辞によって表される統合的な方法以外に、所有カテゴリーを表すさらに二つの方法がある。基本的に三つのタイプは全て同一の意味を持つ」と述べ、二つ目のタイプとして、属格人称代名詞と所有接辞によって統語的にも形態的にも表されるタイプ、三つ目のタイプとして、ロシア語や他のヨーロッパの言語と同様に、所有關係が属格人称代名詞のみに

よって統語的に表されるタイプがあるとし、以下のトルクメン語の例を挙げている。

## (12) 「私の馬」

- a. *meniŋ*      *at-ïm*  
 1SG.GEN      馬 -1SG.POSS
- b. *meniŋ*      *at*  
 1SG.GEN      馬

(Dmitriev 1956: 34)

Dmitriev (1956: 34) は、「これら三つのタイプのうちどれがどのような場合に最も用いられるかという問題は、文法の領域だけでなく、文体の領域にも関わっている」として、それぞれのタイプの特徴について、「三つ目のタイプ (例: *meniŋ at*) は、8世紀のオルホン碑文にも見られるため、これをロシア語の影響で生まれた構造であるとするのは正しくない。*meniŋ atım* のような表現では、二重の方法で表されている『私の』という概念が強調されているが、*atım* という構造では明らかに、重心が *at* という語にある」と述べている。さらに、「*meniŋ at* のタイプは文語よりもむしろ会話で用いられる。これは一定の感情性にも関係しているが、個人的なものではなく、いわば集団的な性格のものである」と述べ、以下のバシキール語の例を挙げている。

- (13) *Beđ-đeŋ*      *yer-đär*      *yer*      *tügel.*  
 1PL-GEN      場所 -PL      場所      NEG.COP  
 「私たちの場所は、場所ではない。」

(Dmitriev 1956: 34)

Dmitriev (1956: 34) はこのタイプについてさらに、「このタイプが一・二人称単複でのみ、一部の言語では一・二人称の複数でのみ用いられることは注意に値する」としている。個人的な感情については四つ目の方法、つまり二つ目のタイプを並べ替えた構造が表すとし、以下のバシキール語の例を挙げている。

## (14) 「私の馬がいなくなった。」

- a. *Meniŋ*      *at-ïm*      *yuyal-dï.*  
 1SG.GEN      馬 -1SG.POSS      いなくなる -PST  
 “Мой конь пропал.”
- b. *At-ïm*      *mineŋ*      *yuyal-dï.*  
 馬 -1SG.POSS      1SG.GEN      いなくなる -PST  
 “Конь-то мой пропал.”

(Dmitriev 1956: 34)

## 1.4. 問題提起

以上のように先行研究は、属格所有構造を統合型・分析統合型・分析型の三つに分け、1) 統合型は文語でも口語でも同程度に用いられ、被所有名詞が強調されている、2) 分析統合型は文語的で、所有の概念を強調する際に用いられる、3) 分析型は一・二人称に限られ口語的である、といった記述をしている。

まず限定部の有無という大きな違いによって、統合型とそれ以外が分けられると考えられるが、上で挙げた先行研究の記述は不十分であると感じられる。

トルコ語に関する先行研究である Göksel and Kerslake (2003) は、所有名詞句における属格標示された代名詞の出現条件についてより詳細に記述している。

Göksel and Kerslake (2003: 240, 241) は、所有名詞句における属格標示された代名詞に関して、対応する所有標識がある場合は通常省略され、節の主語でもある場合は現れないとしている。属格標示された代名詞が用いられる条件として Göksel and Kerslake (2003: 243, 244) は、以下の三つを挙げている。

- (a) 被所有物が他の何かと比較されている場合  
 (b) 所有者に焦点が当たっている場合  
 (c) 会話の最初の文、もしくは話者が新しい話題を導入する文において

トルコ語と同じくチュルク諸語に属するタタール語においても、属格標示された代名詞の使用条件を満たすかどうかで、まず統合型とそれ以外が分けられると

考えることができるだろう。Göksel and Kerslake (2003: 163) は、インフォーマルな文体では、特に属格標示された限定部が一・二人称代名詞である場合、しばしば属格所有構造の主要部が所有接辞なしになるが、このような構造は、上で挙げた属格標示された代名詞の使用条件を満たす文脈でのみ起こると述べている。タタール語においては条件が多少異なっている可能性は否定できないが、本稿では特に残りの二つの構造、分析統合型と分析型に着目するため、これに関しては稿を改めて議論したい。

分析統合型と分析型はいずれも限定部を持ち、所属人称接辞の有無によって分けられる。筆者の観察では、所属人称接辞の有無には先行研究で述べられている文体的な要因以外に、形態統語的要因も関わっているように感じられる。Dmitriev (1956) は、分析型が集団的な感情性を表すと述べ、所有者が一・二人称の場合のみ用いられることのみならず、一部の言語では所有者が一・二人称複数の場合にのみ用いられることを指摘しているが、定量的な調査を行った上での記述ではない。

以上を踏まえ本稿は詳細な調査を行い、タタール語の所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度に影響を与える要因を明らかにし、その理由を考察することを目的とする。

## 2. 調査

### 2.1. 調査方法

コーパス調査とインフォーマント調査を行う。まず、タタール語のオンラインコーパス Corpus of Written Tatar (以下 CWT)<sup>9</sup>を用いて所有名詞句を抽出し、所属人称接辞の出現頻度を調べる。次に、筆者が作成した例文をインフォーマント<sup>10</sup>に提示し、「容認可能」、「違和感がある」、「容認不可」のいずれかを選んでもらう形で容認度を調べる。

## 2.2. 調査結果

本節では、コーパス調査およびインフォーマント調査の結果について述べる。調査の結果、以下の形態統語的要因が所属人称接辞の出現頻度に影響を与えていることが分かった。

- 限定部の人称・数
- 限定部と主要部の隣接性
- 限定部と主要部の語順
- 主要部要素
- 主要部に付く接辞
- 介在要素
- 存在文・所有文

以下、2.2.1 節で限定部の人称・数、2.2.2 節で限定部と主要部の隣接性、2.2.3 節で限定部と主要部の語順、2.2.4 節で主要部要素、2.2.5 節で主要部に付く接辞、2.2.6 節で介在要素、2.2.7 節で存在文・所有文について述べ、2.2.8 節で調査結果をまとめる。

### 2.2.1. 限定部の人称・数

調査の結果、限定部の人称・数によって所属人称接辞の出現頻度に差があり、特に二人称単数が最も高く一人称複数数が最も低いことが分かった。

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWT で一語目に一・二人称の属格人称代名詞を入力し検索、ヒットした例文の中から、所有名詞句の例を人称代名詞ごとに 250 例ずつ抽出し、所属人称接辞の有無を調べたところ、以下のような結果が得られた（以下、表中でかっこ内に示した割合は小数点第二位を四捨五入したものである）。

表 8：限定部の人称・数による所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞            |                   | 計           |
|-----------------------|-------------------|-------------------|-------------|
|                       | なし                | あり                |             |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | 91 (36.4)         | <b>159 (63.6)</b> | 250 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezney</i> ) | <b>209 (83.6)</b> | 41 (16.4)         | 250 (100.0) |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | 51 (20.4)         | <b>199 (79.6)</b> | 250 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezney</i> ) | <b>134 (53.6)</b> | 116 (46.4)        | 250 (100.0) |

表 8 から分かるように、所属人称接辞の出現頻度は、全体的に単数人称で高く、複数人称で低い。特に限定部が一人称複数である場合に最も低く、二人称単数である場合に最も高い。

次にインフォーマント調査の結果を述べる。所属人称接辞が付いた (15, 16)a と、付いていない (15, 16)b を作成し、容認度を調べたところ、所属人称接辞のあるものはすべて容認可能、所属人称接辞のないもののうち一人称複数の (15)b は容認可能で、二人称単数の (16)b は容認不可であるという。

(15) 「私たちの車は壊れた。」

- a. Bez-neŋ mašina<sup>ni</sup>-b'iz watil-di.  
1PL-GEN 車 -1PL.POSS 壊れる -PST
- b. Bez-neŋ mašina watil-di.  
1PL-GEN 車 壊れる -PST

(16) 「君の車は壊れた。」

- a. Sineŋ mašina-ŋ watil-di.  
2SG.GEN 車 -2SG.POSS 壊れる -PST
- b. \*Sineŋ mašina watil-di.  
2SG.GEN 車 壊れる -PST

所属人称接辞のない例が容認可能である一人称複数の例に関してインフォーマントは、どちらかという (15)b のような所属人称接辞のない表現の方がよく使われているという。両者の違いに関しては、所属人称接辞がない場合は所有物が強調され、所属人称接辞がある場合は所有者が強調されるように感じるという。

## 2.2.2. 限定部と主要部の隣接性

調査の結果、限定部と主要部が隣接していない場合は所属人称接辞の出現頻度が高め、隣接している場合は低めであることが分かった (語順が入れ替わっている場合を除く)。

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWT で一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一

語として、二語目に「形容詞」を意味するタグ、単語間の距離を一語として、三語目に「名詞」を意味するタグを入力して検索、人称代名詞ごとに 50 例ずつ抽出し所属人称接辞の有無を調べたところ、以下のような結果が得られた。

表 9: 限定部と主要部の間に形容詞が一語ある場合の所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞           |                  | 計          |
|-----------------------|------------------|------------------|------------|
|                       | なし               | あり               |            |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | 4 (8.0)          | <b>46 (92.0)</b> | 50 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezneŋ</i> ) | <b>26 (52.0)</b> | 24 (48.0)        | 50 (100.0) |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | 4 (8.0)          | <b>46 (92.0)</b> | 50 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezneŋ</i> ) | 11 (22.0)        | <b>39 (78.0)</b> | 50 (100.0) |

次に、CWT で一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語として、二語目に「名詞」を意味するタグを入力して検索、人称代名詞ごとに 50 例ずつ抽出し所属人称接辞の有無を調べたところ、以下のような結果が得られた。

表 10: 限定部と主要部が隣接している場合の所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞           |                  | 計          |
|-----------------------|------------------|------------------|------------|
|                       | なし               | あり               |            |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | <b>28 (56.0)</b> | 22 (44.0)        | 50 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezneŋ</i> ) | <b>40 (80.0)</b> | 10 (22.0)        | 50 (100.0) |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | 15 (30.0)        | <b>35 (70.0)</b> | 50 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezneŋ</i> ) | <b>33 (66.0)</b> | 17 (34.0)        | 50 (100.0) |

表 9 と表 10 を比べると、限定部と主要部の間に形容詞が一語ある場合は、隣接している場合よりも所属人称接辞の出現頻度が高いことが分かる。

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。CWT から抽出された (17)a から所属人称接辞を削除した (17)b を作成し、容認度を調べた結果、(17)b は違和感があるという。続いて、(17)b から *töp* 「主な」を削除した (17)c を作成し、容認度を調べた結果、(17)c も違和感があるが、c よりも b の方が違和感が強いという。

以上の調査の結果から、限定部と主要部が隣接していない場合は隣接している場合に比べ、所属人称接辞



の必要性が高めであるといえる。ただし、隣接している場合でも例外的に、2.2.3節で挙げる「限定部と主要部の語順が入れ替わっている詩的な表現」や、2.2.7節で挙げる「存在文・所有文」などでは、所属人称接辞の出現頻度が高めである。要因の相互関係については第3節で述べる。

(17) 「私の（主な）仕事は牛の乳しぼりだ。」

- a. Minem töp eş-em  
 1SG.GEN 主な 仕事 -1SG.POSS  
 siyir saw-uw.  
 牛 絞る -VN
- b. <sup>??</sup>Minem töp eş  
 1SG.GEN 主な 仕事  
 siyir saw-uw.  
 牛 絞る -VN
- c. <sup>?</sup>Minem eş  
 1SG.GEN 仕事  
 siyir saw-uw.  
 牛 絞る -VN

### 2.2.3. 限定部と主要部の語順

調査の結果、限定部と主要部の語順が入れ替わっている詩的な表現の場合、所属人称接辞の出現頻度が高いことが分かった。

(18) のように、限定部と主要部が入れ替わった構造は、Zakiev at al. (1993) や Dmitriev (1956) では強い感情を表す表現だとされている。Xisamova (2006: 101) によると、特に「詩的な発話」で用いられるという。

- (18) Künel-em minem yäp+yäş qal-ir,  
 心 -1SG.POSS 1SG.GEN 若い 残る -INDEF.FUT  
 hiç qartay-mas.  
 全く 老いる -NEG.INDEF.FUT  
 「わが心は若いまま、全く老いないだろう！」  
 (Xisamova 2006: 102)

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWTで一語目に「名詞」と「主格」を意味するタグ、単語間の距離を一語として、二語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語として、三語目に「文末記号」を意味するタグを入力して検索、所属人称接辞の有無を調べた結果、筆者が主に感嘆符の有無を基準に感情的・詩的な表現と判断したものの中に、所属人称接辞を持たない例は見当たらなかった。なお、詩的でないものに関しては以下のように所属人称接辞を持たない例が少ないが抽出された。

- (19) Ätiy minem fizika+matematika  
 父 1SG.GEN 物理・数学  
fakul'tet-i-n tämamla-yan.  
 学部 -3SG.POSS-ACC 卒業する -PRF  
 「私の父は物理・数学学部を卒業した。」

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。CWTから抽出された(20)aから所属人称接辞を削除した(20)bを作成し、容認度を調べた結果、(20)bは容認不可だという。

- (20) 「汝に栄光あれ、我が祖国よ！」
- a. Dan sija,  
 栄 2SG.DAT  
watan-ibiz bez-nej!  
 祖国 -1PL.POSS 1PL-GEN
- b. <sup>\*</sup>Dan sija,  
 栄 2SG.DAT  
watan bez-nej!  
 祖国 1PL-GEN

一方、詩的な表現ではない(21)aから所属人称接辞を削除した(21)bは容認可能とされた。

コーパス調査の結果、所属人称接辞のない例が抽出されなかったこと、インフォーマント調査の結果、

(21) 「私の勤務時間は自由だ。」

|                    |              |
|--------------------|--------------|
| a. <u>Eš-em-dä</u> | <u>minem</u> |
| 仕事 -1SG.POSS-LOC   | 1SG.GEN      |
| irekle             | grafik.      |
| 自由な                | 表            |
| b. <u>Eš-tä</u>    | <u>minem</u> |
| 仕事 -LOC            | 1SG.GEN      |
| irekle             | grafik.      |
| 自由な                | 表            |

(21)b が容認不可であることから、主要部が限定部の前にある詩的な表現では、所属人称接辞が義務的と考えられる。詩的な表現ではない場合は所属人称接辞のない例も少ないが見られ、その容認度も容認不可ではないことから、主要部が前にあることは所属人称接辞の出現頻度を下げる要因であるとはいえるが、詩的な表現においては、これのみによって所属人称接辞の出現が義務付けられているわけではないと考えられる。

## 2.2.4. 主要部要素

以下、a で相対的な位置関係を表す名詞、b で形容詞や限定詞について述べる。

### a. 相対的な位置関係を表す名詞

属格人称代名詞の右側の文脈には格接辞を伴った *yan* 「横」・*al* 「前」・*art* 「後ろ」・*ös* 「上」・*taraf* 「側」などの相対的な位置関係を表す名詞が高頻度で現れる。調査の結果、主要部がこれらの名詞である場合、所属人称接辞の出現頻度が低いことが分かった。

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWT で、一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語として、二語目に対応する所属人称接辞と格接辞をつけた *yan* 「横」と *al* 「前」、もしくは格接辞のみをつけた *yan* 「横」と *al* 「前」を入力して検索し、ヒット数を合計したところ、以下のような結果が得られた。

表 11: *yan* 「横」が主要部である所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞              |            | 計             |
|-----------------------|---------------------|------------|---------------|
|                       | なし                  | あり         |               |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | <b>1,208 (69.7)</b> | 522 (30.3) | 1,733 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezneŋ</i> ) | <b>755 (96.1)</b>   | 31 (3.9)   | 786 (100.0)   |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | <b>646 (67.3)</b>   | 314 (32.7) | 960 (100.0)   |
| 2PL ( <i>sezneŋ</i> ) | <b>318 (87.4)</b>   | 46 (12.6)  | 364 (100.0)   |

表 12: *al* 「前」が主要部である所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞            |           | 計           |
|-----------------------|-------------------|-----------|-------------|
|                       | なし                | あり        |             |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | <b>324 (77.3)</b> | 95 (22.7) | 419 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezneŋ</i> ) | <b>884 (90.9)</b> | 88 (9.1)  | 972 (100.0) |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | <b>181 (65.8)</b> | 94 (34.2) | 275 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezneŋ</i> ) | <b>395 (82.0)</b> | 87 (18.0) | 482 (100.0) |

表 11 と表 12 を見ると、全体的に所属人称接辞のない形式の出現頻度の方が高いことが分かる。ただし、上で述べた限定部の人称・数による所属人称接辞の出現頻度の差も現れており、限定部が二人称単数である場合に最も高く、一人称複数である場合に最も低い。

次にインフォーマント調査の結果を述べる。CWT から抽出した (22, 23)a に所属人称接辞を加えた (22, 23)b を作成し、容認度を調べた。インフォーマントによると、限定部が一人称複数の場合は所属人称接辞のある (22)b が違和感があり、二人称単数の場合は所属人称接辞のない (23)a が違和感があるという。

(22) 「彼はいつも私たちの側にいる。」

|                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| a. UI              | <u>härwaqit</u>     |
| 3SG                | いつも                 |
| <u>bez-neŋ</u>     | <u>yan-da.</u>      |
| 1PL-GEN            | 横 -LOC              |
| b. <sup>?</sup> UI | <u>härwaqit</u>     |
| 3SG                | いつも                 |
| <u>bez-neŋ</u>     | <u>yan-ibiz-da.</u> |
| 1PL-GEN            | 横 -1PL.POSS-LOC     |

(23) 「私はいつも君の側にいる。」

- a. <sup>?</sup>Min härwaqıt  
1SG いつも  
sineŋ yan-da.  
2SG.GEN 横 -LOC
- b. Min härwaqıt  
1SG いつも  
sineŋ yan-ıŋ-da.  
2SG.GEN 横 -2SG.POSS-LOC

ただしインフォーマントは、(23)aは違和感があるとしながらも、よく使われていると述べた。(15, 16)の結果と比べると、所属人称接辞なしの容認度が高めであるが、限定部の人称・数による差もあることが分かった。

以上の調査の結果から、主要部が位置名詞の場合、限定部の人称・数による差もあるが、全体的に所属人称接辞の出現頻度が低めであり、所属人称接辞なしの容認度も高めであることが分かった。

#### b. 形容詞や限定詞

一方、形容詞や限定詞などが主要部の場合、所属人称接辞が義務的であることが分かった。タートル語では、形容詞や限定詞などの名詞を修飾する語が名詞的に用いられることがあり、(24-26)aのように所有名詞句の主要部になることもある。

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWTで一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語として、二語目に「形容詞」や「数詞」を意味するタグを入力して検索、所属人称接辞の有無を調べた結果、これらの語が主要部の場合には所属人称接辞を持たない例は見つからなかった。

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。CWTから抽出された(24-26)aから所属人称接辞を削除した(24-26)bを作成し容認度を調べた結果、(24-26)bはいずれも容認不可だという。

(24) 「君は私の大切な人だ。」

- a. Sin minem qäderle-m.  
2SG 1SG.GEN 大切な -1SG.POSS
- b. \*Sin minem qäderle.  
2SG 1SG.GEN 大切な

(25) 「私たちはあなたたちを二人とも信じない！」

- a. Bez sez-neŋ ike-gez-gä  
1PL 2PL.GEN 2-2PL.POSS-DAT  
dä išan-miy-biz!  
も 信じる -NEG.PRS-1PL
- b. \*Bez sez-neŋ ike-gä  
1PL 2PL.GEN 2-DAT  
dä išan-miy-biz!  
も 信じる -NEG.PRS-1PL

(26) 「あなたたちのうち、どちらがより美しいか？」

- a. Sez-neŋ qaysi-yiz matur-raq?  
2PL.GEN どれ -2PL.POSS 美しい -COMP
- b. \*Sez-neŋ qaysi matur-raq?  
2PL.GEN どれ 美しい -COMP

### 2.2.5. 主要部に付く接辞

#### a. 副詞派生接辞 -čA<sup>iii</sup>

副詞派生接辞 -čA は、名詞や形容詞などに接尾し、主に様態を表す副詞を派生し(例: *tölke-čä* 「狐のように」)、人称代名詞に接尾する場合は属格を要求する(例: *minem-čä* 「私のように、私としては」)。調査の結果、主要部に副詞派生接辞 -čA が接尾している場合は、所属人称接辞の出現が義務的であることが分かった。

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWTで一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語として、二語目に副詞派生接辞 -čA が接尾した *fiker* 「意見」・*uy* 「考え」・*qaraş* 「見解」を入力して検索した結果、所属人称接辞が付いていない例は見つからなかった。

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。CWT から抽出された (27)a から所属人称接辞を削除した (27)b を作成し、容認度を調べた結果、(27)b は容認不可だという。

(27) 「私の考えでは、統一国家試験は必要だ。」

- a. Minem fiker-em-čä,  
 1SG.GEN 考え -1SG.POSS-ADVZ  
 BDI kiräk.  
 統一国家試験 必要だ
- b. \*Minem fiker-čä,  
 1SG.GEN 考え -ADVZ  
 BDI kiräk.  
 統一国家試験 必要だ

次に、副詞派生接辞ではなく後置詞 *buyinča* 「～によると」を用いて (27)a とほぼ同じ意味を表す (28)a と、それから所属人称接辞を削除した (28)b を作成し容認度を調べた結果、いずれも容認可能だという。

(28) 「私の考えによると、統一国家試験は必要だ。」

- a. Minem fiker-em buyinča,  
 1SG.GEN 考え -1SG.POSS によると  
 BDI kiräk.  
 統一国家試験 必要だ
- b. Minem fiker buyinča,  
 1SG.GEN 考え によると  
 BDI kiräk.  
 統一国家試験 必要だ

コーパス調査の結果、所属人称接辞が付いていない例が見つからないこと、インフォーマント調査の結果、(27)b が容認不可で (28)b が容認可能であることから、主要部に副詞派生接辞 *-čä* が接尾している場合は所属人称接辞の出現が義務的であると考えられる。

b. 与格を用いた一部の表現

調査の結果、1) 主要部が与格をとり「～のために」

という意味を表す *fayda* 「利益」・*xaq* 「権利」・*xörmät* 「名誉」といった名詞である場合、2) 主要部が与格をとる一部のロシア語直訳的な表現では、所属人称接辞の出現頻度が低いことが分かった。

まず、1) に関して、コーパス調査の結果を述べる。CWT で、一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語として、二語目に対応する所属人称接辞と与格をつけた *fayda* 「利益」・*xaq* 「権利」・*xörmät* 「名誉」、もしくは与格のみをつけた *fayda* 「利益」・*xaq* 「権利」・*xörmät* 「名誉」を入力して検索し、ヒット数を合計したところ、以下のような結果が得られた。

表 13: *fayda* + 与格が主要部である所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞      |          | 計           |
|-----------------------|-------------|----------|-------------|
|                       | なし          | あり       |             |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | 38 (100.0)  | 0 (0.0)  | 38 (100.0)  |
| 1PL ( <i>bezneŋ</i> ) | 257 (100.0) | 0 (0.0)  | 257 (100.0) |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | 10 (62.5)   | 6 (37.5) | 16 (100.0)  |
| 2PL ( <i>sezneŋ</i> ) | 41 (82.0)   | 9 (18.0) | 50 (100.0)  |

表 14: *xaq* + 与格が主要部である所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞     |           | 計          |
|-----------------------|------------|-----------|------------|
|                       | なし         | あり        |            |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | 23 (95.8)  | 1 (4.2)   | 24 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezneŋ</i> ) | 18 (100.0) | 0 (0.0)   | 18 (100.0) |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | 30 (73.2)  | 11 (26.8) | 41 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezneŋ</i> ) | 13 (82.0)  | 0 (18.0)  | 13 (100.0) |

表 15: *xörmät* + 与格が主要部である所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度

|                       | 所属人称接辞     |         | 計          |
|-----------------------|------------|---------|------------|
|                       | なし         | あり      |            |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | 15 (93.8)  | 1 (6.2) | 16 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezneŋ</i> ) | 15 (100.0) | 0 (0.0) | 15 (100.0) |
| 2SG ( <i>sineŋ</i> )  | 13 (92.3)  | 1 (7.7) | 14 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezneŋ</i> ) | 37 (100.0) | 0 (0.0) | 37 (100.0) |

次にインフォーマント調査の結果を述べる。CWT から抽出した (29-31)a と、それに所属人称接辞を加えた (29-31)b を作成し、容認度を調べた結果、所属人称接辞のない (29-31)a は容認可能で、所属人称接辞のある

(29-31)b は違和感があるという。主要部が抽象的な名詞で、限定部と所有関係にない場合は、所属人称接辞があまり必要ないように感じられ、(29-31)b のように言うとニュアンスが変わってしまうという。

(29) 「彼らは私たちのために働かない。」

- a. Alar            bez-nen    fayda-ya  
 3PL            1PL-GEN    利益 -DAT  
 ešlā-miy-lār.  
 働く -NEG.PRS-3PL
- b. <sup>?</sup>Alar            bez-nen    fayda-biz-ya  
 3PL            1PL-GEN    利益 -1PL.POSS-DAT  
 ešlā-miy-lār.  
 働く -NEG.PRS-3PL

(30) 「永遠に生きたい、君のために！」

- a. Månge        yāšā-rgā    teliy-m,  
 永遠に        生きる -INF    望む.PRS-1SG  
sinen            xaq-qa!  
 2SG.GEN        権利 -DAT
- b. <sup>?</sup>Månge        yāšā-rgā    teliy-m,  
 永遠に        生きる -INF    望む.PRS-1SG  
sinen            xaq-iŋ-a!  
 2SG.GEN        権利 -2SG.POSS-DAT

(31) 「あなたのために二曲演奏します。」

- a. Sez-nen        xörmät-kä            ike  
 2PL-GEN        名誉 -DAT            2  
 jir                bašqar-a-m.  
 歌                演奏する -PRS-1SG
- b. <sup>?</sup>Sez-nen        xörmät-egöz-gä        ike  
 2PL-GEN        名誉 -2PL.POSS-DAT    2  
 jir                bašqar-a-m.  
 歌                演奏する -PRS-1SG

インフォーマントによると、上の (29-31) の例文で主要部は意味的に後置詞 *öčen* 「～のために」と置き換え可能であるが、与格をとった *fayda* 「利益」を主

要部とするもののうち、以下の (32)a ような例では置き換えられないという。この例でも、所属人称接辞を加えた (32)b は違和感があるという。以下の例文における *beznen faydaya* はロシア語 *в нашу пользу* の直訳的な表現であるという。

(32) 「試合は我々の勝利に終わった。」

- a. Uyin            bez-nen        fayda-ya  
 試合            1PL-GEN        利益 -DAT  
 tämamlan-dī.  
 終わる -PST
- b. <sup>?</sup>Uyin            bez-nen        fayda-biz-ya  
 試合            1PL-GEN        利益 -1PL.POSS-DAT  
 tämamlan-dī  
 終わる -PST

次に、2) についてである。上記のもの以外にも、主要部が与格をとる一部のロシア語直訳的な表現では所属人称接辞の出現頻度が低いことが分かった。まず、「～の見方では」という意味を表す、属格の名詞・代名詞と、与格の付いた *qaraš* 「見方」からなる表現である。コーパス調査の結果、(33)a のように所属人称接辞なしのものが 475 例ヒットしたのに対し、(33)b のように所属人称接辞が付いた例は見つからなかった。インフォーマントによると、所属人称接辞が付いた (33)b は容認不可だという。以下の例文における *minem qarašqa* は、ロシア語 *на мой взгляд* の直訳的な表現だという。

(33) 「私の見方では、これは議論の余地がある。」

- a. Minem            qaraš-qa,  
 1SG.GEN        見方 -DAT  
 bu                bāxāsle.  
 これ            議論の余地がある
- b. \*Minem            qaraš-īm-a,  
 1SG.GEN        見方 -1SG.POSS-DAT  
 bu                bāxāsle.  
 これ            議論の余地がある

次に、「紀元前」という意味を表す *bezneŋ eraya qädär* である。インフォーマントによると、これはロシア語 *до нашей эры* の直訳的な表現だという。コーパス調査の結果、(34)a のように所属人称接辞なしのものが 370 件ヒットしたのに対し、(34)b のように所属人称接辞のついた例は見つからなかった。インフォーマントによると、所属人称接辞が付いた (34)b は違和感があるという。

- (34) 「紀元前」
- |    |                             |                   |       |
|----|-----------------------------|-------------------|-------|
| a. | <u>bez-neŋ</u>              | <u>era-ya</u>     | qädär |
|    | 1PL-GEN                     | 時代 -DAT           | まで    |
| b. | <sup>?</sup> <u>bez-neŋ</u> | <u>era-büz-ya</u> | qädär |
|    | 1PL-GEN                     | 時代 -1PL.POSS-DAT  | まで    |

## 2.2.6. 介在要素

以下のように限定部と主要部の間に再帰代名詞 *üz* が介在する場合は、所属人称接辞がほぼ義務的であることが分かった。

- (35) Bez-neŋ üz ara-büz-da
- |         |       |                 |         |
|---------|-------|-----------------|---------|
| 1PL-GEN | REFL  | 間 -1PL.POSS-LOC |         |
| dusliq  | digän | närsä           | bar=mī? |
| 友情      | という   | もの              | ある =Q   |
- 「私たち自身の間に、友情というものがあるのか？」

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWT で一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語として、二語目に再帰代名詞 *üz*、単語間の距離を一語として、三語目に「名詞」を意味するタグを入力して検索、人称代名詞ごとに 50 例ずつ抽出し所属人称接辞の有無を調べた結果、所属人称接辞を持たない例は、詩の一節である以下の一例のみであった。

- (36) Minem üz köç,
- |         |        |                 |
|---------|--------|-----------------|
| 1SG-GEN | REFL   | 力               |
| bütän   | köç-kä | tayan-miy-m.    |
| 他の      | 力 -DAT | 頼る -NEG.PRS-1SG |
- 「私自身の力だ、私は他の力に頼らない。」

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。(35) の所属人称接辞を削除した (37)a を作成し、容認度を調べた結果、(37)a は違和感があるという。次に、(37)a から再帰代名詞を削除した (37)b を作成し、容認度を調べた結果、(37)b は容認可能だという。

- (37) a. <sup>?</sup>Bez-neŋ üz ara-da
- |         |       |        |         |
|---------|-------|--------|---------|
| 1PL-GEN | REFL  | 間 -LOC |         |
| dusliq  | digän | närsä  | bar=mī? |
| 友情      | という   | もの     | ある =Q   |
- 「私たち自身の間に、友情というものがあるのか？」
- b. Bez-neŋ ara-da
- |         |        |       |         |
|---------|--------|-------|---------|
| 1PL-GEN | 間 -LOC |       |         |
| dusliq  | digän  | närsä | bar=mī? |
| 友情      | という    | もの    | ある =Q   |
- 「私たちの間に、友情というものがあるのか？」

コーパス調査の結果、所属人称接辞が付いていない例が非常に少ないこと、インフォーマント調査の結果、(37)a の容認度が低く (37)b は容認可能であることから、限定部と主要部の間に再帰代名詞 *üz* が介在する場合は所属人称接辞の必要性が高いと考えられる。

## 2.2.7. 存在文・所有文

調査の結果、存在文・所有文中の所有名詞句では、所属人称接辞の出現頻度が高めであることが分かった。

存在文は、場所を表す位格名詞句 + 存在するものを表す名詞句 + 存在述語 *bar* 「ある」、*yüq* 「ない」もしくはコンピュータ動詞 *bul-* によって表される。

- (38) a. Anda minem dokument-ım bar.  
 そこに 1SG.LOC 書類-1SG.POSS ある  
 「そこに私の書類がある。」

所有文は叙述所有を表す文であり、所有名詞句と存在述語 *bar* 「ある」、*yuq* 「ない」もしくはコンピュータ動詞 *bul-* によって表される。

- (39) a. Minem mašina-m bar.  
 1SG.GEN 車-1SG.POSS ある  
 「私は車を持っている(lit. 私の車がある)。』

まず、コーパス調査の結果を述べる。CWT で、一語目に一・二人称の属格人称代名詞、単語間の距離を一語とし、二語目に「名詞」と「主格」を意味するタグ、単語間の距離を一語とし、三語目に *bar* 「ある」または *yuq* 「ない」を入力し、ヒットした例文から存在文・所有文を人称代名詞ごとに 50 例ずつ（ヒット数が 50 例以下の場合は全て）抽出し、所属人称接辞の有無を調べたところ、以下のような結果が得られた。

表 16：存在文・所有文中の所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度 (*bar* 「ある」)

|                       | 所属人称接辞    |                  | 計          |
|-----------------------|-----------|------------------|------------|
|                       | なし        | あり               |            |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | 4 (93.8)  | <b>46 (92.0)</b> | 50 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezney</i> ) | 23 (46.0) | <b>27 (54.0)</b> | 50 (100.0) |
| 2SG ( <i>siney</i> )  | 4 (8.0)   | <b>46 (92.0)</b> | 50 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezney</i> ) | 13 (26.0) | <b>37 (74.0)</b> | 50 (100.0) |

表 17：存在文・所有文中の所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度 (*yuq* 「ない」)

|                       | 所属人称接辞    |                  | 計          |
|-----------------------|-----------|------------------|------------|
|                       | なし        | あり               |            |
| 1SG ( <i>minem</i> )  | 12 (24.0) | <b>38 (76.0)</b> | 50 (100.0) |
| 1PL ( <i>bezney</i> ) | 22 (44.0) | <b>28 (56.0)</b> | 50 (100.0) |
| 2SG ( <i>siney</i> )  | 3 (6.0)   | <b>47 (94.0)</b> | 50 (100.0) |
| 2PL ( <i>sezney</i> ) | 4 (13.3)  | <b>26 (86.7)</b> | 50 (100.0) |

次に、インフォーマント調査の結果を述べる。まず、所有文に関してである。(39)a の所属人称接辞を削除

した例文 (39)b を作成し、容認度を調べた結果、(39)b は容認不可だという。

- (39) b. \*Minem mašina bar.  
 1SG.GEN 車 ある  
 「(意図した意味) 私は車を持っている。」

ただし、(40) のように限定部が *bezney* 「私たちの」である場合は容認可能だが違和感があるになるという。よって、限定部の人称・数によって所属人称接辞なしの容認度に差があると言える。

- (40) <sup>?</sup>Bez-nej mašina bar.  
 1PL.GEN 車 ある  
 「私たちは車を持っている。」

次に、存在文に関してである。(38)a の所属人称接辞を削除した例文 (38)b を作成し、容認度を調べた結果、(38)b は容認可能だが (38)a とは意味が異なるという。(38)a での書類は「私」の所有物であるのに対し、(38)b では「私」に関する書類であるという。

- (38) b. Anda minem dokument bar.  
 そこに 1SG.LOC 書類 ある  
 「そこに私の書類がある。」

その他の例文でも同様の調査を行った結果、存在文では所属人称接辞を削除した例文は容認可能～違和感があると判定され、所有文に比べ容認度が高めであった。

コーパス調査とインフォーマント調査の結果から、所有名詞句が存在文・所有文中にある場合、所属人称接辞の必要性が高いと言える。

## 2.2.8. 調査結果のまとめ

以上の調査結果を簡潔にまとめた表を以下に挙げる。所属人称接辞の出現頻度が特に高いものは太字で示した。なお、以下の表は各項目に関して行った調査

の結果をまとめたものであり、要因の相互関係を考慮したうえで全般的な傾向を示したものではないことに注意されたい（要因の相互関係については第3節で述べる）。

### 3. 考察

本章では調査結果に関する考察を行う。表18から分かるように、所属人称接辞の出現頻度に影響を与える要因は、所属人称接辞の有無を義務的にする要因と、出現頻度を高めるまたは低める要因に分けることができる。3.1節で所属人称接辞の有無を義務的にする要因、3.2節で所属人称接辞の出現頻度を高めるまたは低める要因、3.3節で要因の相互関係について述べる。

#### 3.1. 所属人称接辞の有無を義務的にする要因

以下の環境では、所属人称接辞の出現頻度が限定部の人称・数にかかわらず100%に近く、所属人称接辞がない場合の容認度も非常に低いため、所属人称接辞

の出現がほぼ義務的であるといえる。

- 主要部に副詞派生接辞 *-čA* が接尾している場合

2.2.5節で副詞派生接辞 *-čA* が接尾する例として挙げた *fiker* 「意見」・*uy* 「考え」・*qaraš* 「見解」の3語は意味・用法が極めて近い。しかし、これらの名詞が主要部である所有名詞句（副詞派生接辞 *-čA* が付いている例を除く）における所属人称接辞の出現頻度を調べた結果、表8に近い数値が得られた。さらに、筆者の別稿（未発表）における調査では、*-čA* が動名詞に接尾する場合も所属人称接辞が義務的である。よって、所属人称接辞の出現を義務的にしているのはこれらの名詞ではなく、副詞派生接辞 *-čA* であると考えられる。

(41) 「私が信じるところによると」

- a. *minem*            *išan-uw-īm-ča*  
 1SG.GEN            信じる -VN-1SG.POSS-ADVLZ
- b. \**minem*            *išan-uw-ča*  
 1SG.GEN            信じる -VN-ADVLZ

表18：限定部を持つ所有名詞句における所属人称接辞に関する調査結果のまとめ

出現頻度：◎非常に高い ○高め △低め  
 容認度：○容認可能 △違和感がある ×容認不可

|             |          | 出現頻度 | 容認度  |      |
|-------------|----------|------|------|------|
|             |          |      | 接辞あり | 接辞なし |
| 限定部の人称・数    | 二人称単数    | ○    | ○    | ×    |
|             | 一人称複数    | △    | ○    | ○    |
| 限定部と主要部の隣接性 | 隣接       | △    | ○    | △    |
|             | 非隣接      | ○    | ○    | △    |
| 語順          | 倒置（詩的表現） | ◎    | ○    | ×    |
| 主要部要素       | 形容詞・限定詞  | ◎    | ○    | ×    |
|             | 位置関係名詞   | △    | ○～△  | ○～△  |
| 主要部に付く接辞    | 副詞派生接辞   | ◎    | ○    | ×    |
|             | 与格（一部表現） | △    | △    | ○    |
| 介在要素        | 再帰代名詞    | ◎    | ○    | ×    |
| 所有文と存在文     | 所有文      | ○    | ○    | △～×  |
|             | 存在文      | ○    | ○    | ○～△  |



- 再帰代名詞 *üz* が介在する場合

再帰代名詞 *üz* が所属人称接辞の出現を義務的にしていると考えられる。なお、筆者の観察では、再帰代名詞に所属人称接辞と属格が付いた形が介在する場合は、主要部名詞に所属人称接辞が現れない例もよく見られる。

|      |                         |                    |                   |      |
|------|-------------------------|--------------------|-------------------|------|
| (42) | Bez-neŋ                 | <b>üz-ebez-neŋ</b> | <i>žurnal-niŋ</i> |      |
|      | 1PL-GEN                 | REFL-1PL.POSS-GEN  | 雑誌 -GEN           |      |
|      | da                      | <i>sajt-ï</i>      | bar               | bit. |
|      | も                       | サイト -3SG.POSS      | ある                | EMPH |
|      | 「私たち自身の雑誌のサイトもあるじゃないか。」 |                    |                   |      |

- 主要部が形容詞や限定詞である場合

名詞としての機能は、形容詞や限定詞の典型的な機能ではない。調査結果は、これらが名詞的に機能していることを示すために所属人称接辞が必要である可能性を示唆している。

- 限定部と主要部の位置が入れ替わった詩的な表現の場合

主要部が先行するという統語的要因と、所有の強調や感情性の高さという意味的な要因が複合的に作用していることによるものと考えられる。

一方、所属人称接辞が現れないことが義務的であると考えられる環境、つまり、限定部の人称・数に関わらず所属人称接辞の出現頻度が0%に近く、所属人称接辞がある場合の容認度が非常に低い環境は、筆者の調査の限りでは、「～の見方では」という意味を表す、属格人称代名詞と与格標示された *qaraš* 「見方」からなるロシア語直訳的な定型表現のみであった。これは、所属人称接辞を持たないロシア語の表現の翻訳借用であるためだと考えられる。

### 3.1. 所属人称接辞の出現頻度を高めるまたは低める要因

次に、所属人称接辞の有無が義務的ではないが、出

現頻度を高めるまたは低める要因についてである。

- 限定部の人称・数

調査の結果、限定部が複数人称（特に一人称複数）の場合は所属人称接辞の出現頻度が高く、単数人称（特に二人称単数）の場合は低いことが分かった。多くの場合、限定部の人称・数による所属人称接辞の出現頻度は高い順に 2SG > 1SG > 2PL > 1PL であった。

この出現頻度の差には、人称代名詞の指示対象が単数かどうか反映されている可能性があると考えられる。複数人称代名詞のうち、二人称複数の代名詞 *sez* は二人称単数の敬称も表しうる。よって人称代名詞を、指示対象の単数性の高い順に並べると、1SG (*min*), 2SG (*sin*) > 2PL (*sez*) > 1PL (*bez*) となる。

この仮説は、所有者が一人（「私」や「君」）である場合に、所属人称接辞が落ちにくいように感じるというインフォーマントの感覚から着想を得たものである。しかし、二人称単数の方が一人称単数よりも所属人称接辞の出現頻度が高めであることは説明できない。また、この仮説を立証するには二人称複数の代名詞が表すものが二人称複数か二人称単数の敬称かで所属人称接辞の出現頻度に差があることを示す必要があるが、同形であるため定量的な調査による検証は困難である。そのため、本稿では可能性を指摘するにとどめておきたい。

他に、限定部の人称・数による所属人称接辞の出現頻度の違いに影響を与えている可能性のあるもう一つの要因としては、所属人称接辞の長さという形態的な要因が考えられる。単数人称の所属人称接辞は 0-1 音節 (*-m*, *-Em*; *-ŋ*, *-Eŋ*) であるのに対し、複数人称のものは 1-2 音節 (*-bEz*, *-EbEz*; *-GEz*, *-EGEz*) であり、複数人称のものの方が長い。そのため、経済性の観点からより落ちやすい可能性がある。

- 限定部と主要部の隣接性

調査の結果、限定部と主要部が隣接している場合は所属人称接辞の出現頻度が全体的に低め、限定部と主要部の間に形容詞が一語ある場合は全体的に高めであ

ることが分かった(語順が入れ替わっている場合を除く)。これは、隣接している場合は限定部と主要部の結びつきが所属人称接辞がなくても分かりやすいのに対し、離れている場合は所属人称接辞がないと分かりにくいためであると考えられる。

- 主要部が相対的な位置関係を表す名詞である場合  
調査の結果、主要部が相対的な位置関係を表す名詞である場合は所属人称接辞の出現頻度が低いことが分かった。考えられる理由として、主要部が後置詞的に機能する抽象名詞であることが挙げられる。Xisamova (2006) は、相対的な位置関係を表す名詞を、「後置詞の役割を果たす補助名詞」(Xisamova 2006: 302) とし、後置詞の項目で扱っている。

- 与格を用いた一部の表現  
調査の結果、主要部が「～のために」を表す与格名詞である場合は所属人称接辞の出現頻度が低いことが分かった。考えられる理由として、主要部が相対的な位置関係を表す名詞である場合と同じく、主要部が後置詞 *očēn* 「～のために」のように機能する抽象名詞であることが挙げられる。与格を持つ一部のロシア語直訳的な表現でも所属人称接辞の出現頻度が低いが、これは所属人称接辞を持たないロシア語の影響も考えられる。

- 存在文・所有文  
調査の結果、存在文・所有文中の所有名詞句では所属人称接辞の出現頻度が高めであることが分かった。存在文と所有文に共通するのは、存在述語 *bar / yuq* を持っているという点であり、この統語的な要因が影響している可能性がある。

### 3.3. 要因の相互関係

以上で見てきたように、本稿で挙げた諸要因は、所属人称接辞の出現を義務的にするものもあれば、出現頻度を高める、または低める程度のものもある。さら

に、後述のようにこれらは全体に関わるものから個別具体的なものまであり、お互いに重なりうる。したがって、要因のレベルの違いと相互関係を考慮したうえで、個々の事例を観察し、要因間の優先順位を明らかにする必要がある。

本稿で挙げた諸要因は様々な観点からのものが混在しているが、これらは大きく、全体に関わる要因と、個別具体的な要因に分けることができる。「限定部の人称・数」および「限定部と主要部の隣接性」は、本稿で分析の対象としたすべての所有名詞句に関わる要因である。他の要因はいずれもより個別具体的であり、これらはお互い重なるものと重ならないものがある。例えば、再帰代名詞 *üz* の介在は、「主要部が相対的な位置関係を表す名詞である場合」や「存在文・所有文」でも起こりうる一方、*-čA* は限られた名詞にのみ付いて副詞を派生するため、それら二つの要因とは重ならない。

以下、要因の相互関係を、「3.1 節で挙げた要因が 3.2 節で挙げた要因と重なる場合」と、「3.2 節で挙げた要因同士が重なる場合」の二つに分け、それぞれ具体的な事例を挙げて考察する。

- 3.1 節で挙げた要因が 3.2 節で挙げた要因と重なる場合

この場合、3.1 節で挙げたより強力な要因が優先される。例えば、2.2.6 節で挙げた (35) では、所属人称接辞を義務的にする要因である「再帰代名詞 *üz* が介在する場合」(これは、所属人称接辞の出現頻度を高める要因である「限定部と主要部が隣接していない場合」を内包する) と、所属人称接辞の出現頻度を低める要因である「限定部が一人称複数である場合」・「主要部が相対的な位置関係を表す名詞である場合」が重なっているが、所属人称接辞が出現している。インフォーマント調査では、(35) から所属人称接辞を削除した (37)a は違和感があると判定されている。再帰代名詞 *üz* が介在しているもの全般について行ったコーパス調査の結果を見ても、所属人称接辞のない例は、詩の一節という特殊な例が 1 例抽出されたのみである。

● 3.2節で挙げた要因同士が重なる場合

a. 所属人称接辞の出現頻度を高める要因のみが重なる場合

この場合、所属人称接辞の出現頻度が非常に高くなる。例えば、いずれも所属人称接辞の出現頻度を高める要因である「存在・所有文」・「限定部と主要部が隣接していない場合」・「限定部が二人称単数である場合」が重なった場合、CWTからこの条件に当てはまるものは16例抽出されたが、16例とも所属人称接辞が現れている。

b. 所属人称接辞の出現頻度を高める要因と低める要因が重なる場合

この場合、所属人称接辞の出現頻度は要因の数や力によって異なる。表16, 17を見ると、いずれも所属人称接辞の出現頻度を高める要因である「存在・所有文」と「限定部が二人称単数である場合」が重なることで、所属人称接辞の出現頻度が9割を超えている。所属人称接辞の出現頻度を低める要因である「限定部と主要部が隣接している場合」も重なっているものの、前者二つの要因の力が大きいと言える。同じく表16, 17で、所属人称接辞の出現頻度を高める要因である「存在文・所有文」と、低める要因である「限定部が一人称複数である場合」・「限定部と主要部が隣接している場合」が重なった場合を見ると、所属人称接辞の出現頻度は5-6割となっている。表13-15を見ると、所属人称接辞の出現頻度を高める要因である「限定部が二人称単数である場合」と、低める要因である「与格を用いた一部の表現」・「限定部と主要部が隣接している場合」が重なり、所属人称接辞の出現頻度は平均で2-3割となっている。

c. 所属人称接辞の出現頻度を低める要因のみが重なる場合

この場合、所属人称接辞の出現頻度が非常に低くなる。例えば、表11, 12を見ると、いずれも所属人称接

辞の出現頻度を低める要因である「主要部が相対的な位置関係を表す名詞である場合」・「限定部が一人称複数である場合」・「限定部と主要部が隣接している場合」が重なることで、所属人称接辞の出現頻度が1割を下回っている。

特に3.2節で挙げた要因に関しては、全ての要因が互いに重なるわけではないため、正確な優先順位を指定するのは困難であるが、少なくとも以上の事例から、3.1節で挙げた要因の優先順位が高いこと、「限定部と主要部の隣接性」の優先順位が比較的低いことが示唆される。

#### 4. 今後の課題

本稿は、タタール語の所有名詞句における一・二人称所属人称接辞の出現頻度を調査し、先行研究で述べられている文体的な要因だけでなく、所有者の人称・数や主要部要素、限定部と主要部の隣接性などの形態統語的要因が関わっていることを明らかにし、その理由を考察した。

しかし、本稿で挙げた形態統語的要因以外に、意味的な要因も所属人称接辞の出現頻度に影響を与えている可能性がある。そのため、意味的な面にも目を向ける必要がある。さらに、本稿では限定部を持たない統合型や、所属人称接辞の落ちない三人称の限定部を持つ所有名詞句は扱わず、主に一・二人称の限定部を持つ所有名詞句における所属人称接辞の出現頻度に着目して調査を行った。よって、統合型や三人称との関係性も考慮しなければならないだろう。

今後は、他のチュルク諸語についても同様の調査を行いタタール語と比較すること、従属節や主節における主語人称標示に関する調査も行い、これについても他のチュルク諸語と比較することで、タタール語における人称標示の特徴を明らかにできればと考えている。

## 略号一覧

|         |               |            |      |             |       |
|---------|---------------|------------|------|-------------|-------|
| 1, 2, 3 |               | 1, 2, 3 人称 | PN   | person name | 人名    |
| ABL     | ablative      | 奪格         | POSS | possessive  | 所有    |
| ACC     | accusative    | 対格         | PRF  | perfect     | 完了    |
| ADVLZ   | adverbializer | 副詞化        | PRS  | present     | 現在    |
| COP     | copula        | コピュラ       | PST  | past        | 過去    |
| DAT     | dative        | 与格         | Q    | question    | 疑問    |
| EMPH    | emphasis      | 強調         | REFL | reflexive   | 再帰    |
| GEN     | genitive      | 属格         | SG   | singular    | 単数    |
| INF     | infinitive    | 不定形        | VN   | verbal noun | 動名詞   |
| NEG     | negative      | 否定         | -    |             | 接辞境界  |
| LOC     | locative      | 位格         | =    |             | 接語境界  |
| MOD     | modality      | モダリティ      | +    |             | 複合語境界 |
| PL      | plural        | 複数         |      |             |       |

## 参考文献

- Dmitriev, N. K. (1956) Kategorija prinadležnosti. *Issledovanija po sravnitel'noj grammatike tjurkskix jazykov*. Moskva: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR. 22-37.
- Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish A Comprehensive Grammar*, New York: Routledge.
- 菱山湧人 (2017) 「タタール語の所有構造について」 修士論文, 東京外国語大学.
- Nichols, J. (1986) Head-marking and dependent-marking grammar. *Language* (62). Linguistic Society of America. 56-119.
- Timberlake, A. (2004) *A reference grammar of Russian*. Cambridge University Press.
- Xangildin, W. N. (1959) *Tatar tele grammatikası*. Qazan: Tatarstan kitap nāşriyatı.
- Xisamova, F. M. (2006) *Tatar tele morfologiyäse*. Qazan: Mäğäriş nāşriyatı.
- Zakiev, M. Z. et al. (1993) *Tatarskaja grammatika*. T.II. Morfologija. Kazan': Akademija nauk Tatarstana.

## URL

Tatar | Ethnologue (<https://www.ethnologue.com/language/tat>) [ 最終閲覧日 : 2018/8/23 ]

## 調査資料

*Corpus of Written Tatar* ([http://corpus.tatfolk.ru/index\\_tt.php](http://corpus.tatfolk.ru/index_tt.php)) [ 最終閲覧日 : 2018/8/30 ]

## 注

- i チュルク諸語に属し、基本語順は SOV。主にロシア連邦タタールスタン共和国やバシコルトスタン共和国で話される。2010年の全ロシア国勢調査によると、ロシア国内の話者数は428万人 (Ethnologue より要約)。
- ii 所有以外の関係も表しうるが、本稿では便宜上、後述する3通りの構造を持つ名詞句を所有名詞句、標示される人称を所有人称とする。属格標示された名詞句は限定部、所属人称接辞が付く名詞句は主要部と呼ぶ。
- iii タタール語のラテン文字転写は筆者による。例文中の、ロシア語の音韻体系に従って発音される比較的新しいロシア語からの借用語のラテン文字転写は Timberlake (2004: 25) にある linguistic 方式に従う。異なる転写法であることを示すため、それらの借用語は斜字体で示す。
- iv 三人称複数の所属人称接辞としてこれらの形式が用いられることもある。
- v 総語数約1億1,600万語で、マスメディアの記事が60%、文学作品が35%、論文が5%を占める。
- vi タタール語母語話者で、1973年生まれの男性 (カザン出身)。
- vii ロシア語からの借用語であるが、インフォーマントによるとタタール語の音韻体系に従って発音されるのが一般的で、ロシア語の発音とは異なるため、斜字体にしない。
- viii 母音調和に応じて現れる異形態 *-čä*, *-čä* の代表形を本稿では *-čA* とする。以下、その他の形式に関しても本文中では変化する部分を大文字で表した代表形を用いる。